

【調査報告】

戦前アジアを駆け巡り、戦後の沖縄を創った金城秀仁さんインタビュー記録

宮城能彦

金城秀人さんは、大正4年、国頭村奥生まれ、昭和6年に沖縄県立農林学校に入学、昭和9年2月に動向を卒業した後、昭和11年1月10日に福岡歩兵第24連隊に入営、同年4月に満州派遣軍として満州に駐屯、昭和15年2月に福岡の原隊に戻り除隊になった。その後、昭和15年5月6日に台湾星規那産業株式会社に入社、同年7月1日台湾孝雄州旗山郡甲仙農場勤務、昭和17年9月23日より、台湾とジャワ各地でキナ（南アメリカ原産のアカネ科の薬用樹木。マラリアの特効薬として第二次世界大戦頃までは極めて重要であったキニーネの原料）の栽培状況を調査。各地の農園主任などを経て昭和22年にジャワから国頭村奥に帰郷した。

戦後は、琉球農林省農業改良局研究科、琉球臨時中央政府資源局農政課、琉球政府農業改良課長、経済局総務課長、琉球コーリー所長、株式会社國場組取締役、國和会専務理事などを歴任した。平成22年永眠。

【調査日時場所】

2007年12月18日夜、那覇市首里の金城秀仁さん自宅。

【参加者】

- ・ 金城秀仁（大正4年6月19日生）
- ・ 金城ヒデさん（秀仁妻、大正15年5月15日生、奥出身）
- ・ 糸満盛健（昭和18年生・奥出身）
- ・ 糸満園子（盛健妻、昭和19年生、奥出身）
- ・ 金城力人（昭和19年生、奥出身）
- ・ 宮城能彦（昭和35年生、浦添出身）

【収録方法】 ビデオおよびICレコーダー

（能彦）金城さんは、奥で生まれて、幾つまでいらしたんですか。

（金城）僕はね、18、17、あ、学校から出てから、そうだな、多分15、16ぐらいかな。後、沖縄から出る19歳ぐらいかな。18歳かな。

（盛健）奥で先生したのは何ヶ年……。

（金城）あれはずっと後さ。はっはっはっ。

（力人）先生で戻った……

（金城）いやいや、先生というのではない。僕らの頃は「先生といわれる程馬鹿じゃない」という川柳が流行った頃でしょ。先生より仕事がなかった時代なのに。3ヶ年間やりましたよ。先生を。

（能彦）先生をやったのはおいくつの時ですか？

（金城）32、3歳だったはずよ。確か。

（力人）子供、3名とも奥で生まれたのですか。

（金城）ぼくら。うん。次男までおって、3男はなかった。

(金城) 次男がまだ家の前をちよろちよろちよろして、歩く頃だった。もうあちこち回ってね、僕は台湾に行ったから、18かぐらいかな。兵隊検査のためにまた沖縄に帰ってきて、兵隊に行つて、歩兵24連隊に入って、4ヶ月間おつて、また訓練されて、それから満州行つて、4年間おつた。

それから帰ってきて台湾に行つて、そうだな、1年間、今度はジャワ行つて、終戦はジャワだ。兵隊じゃないよ。僕は製薬会社に勤めつておつた。マラリアの薬に苦い薬があるんですよ。キニーネという。キニーネ。あれはキナという木から取るんですよ、キナ。取るんだが、我々は戦争するためには、どうしてもキニーネが無いと困るわけですよ、戦争はね。だからそれを取るために。世界の92%がジャワで、今のインドネシアかね、ジャワで生産されとるから。そこを占領せんといかんから。我々はだから、その前は台湾でその木を栽培していましたよ。キナという木をね。で、それを栽培して、それから遠心分離器にかけたり、そうしてからそのキニーネにするわけだから。

昭和17年、シンガポール陥落した時に僕らは東京に待機しておつて、その後シンガポールに行つて、そこに2、3ヶ月おつて、ジャワ占領した後すぐジャワに行つて、それでジャワで、オランダ人が占領してやつておる農園を僕らが戦争で奪い取つて、経営しておつたわけさ。そうすると今度は、4年後また、日本が負けて今度はまた、彼らにやられて、また、命からがら帰つてきた訳だ。はっはっはっ。

(能彦) 終戦はどちらで。

(金城) 終戦はジャワです。インドネシアの。日本兵は終戦後、港の中のその倉庫の中で、御座引いて、そこで寝転んでた。イギリス軍やオランダ軍は船の中にいっぱい缶詰をもつておつた。俺らはもう腹ペコペコだったけど、日本の兵隊の、味噌の腐つたの物とかは食べられないわけ、だけど、倉庫に行けばいっぱい缶詰なんかあるんだ。みんなよく考えていて、缶詰を開けるもの(缶切り)も取つたりしてね。5、6人で交代して中に入るんだよ。正面では分かるけど、陰に入ったら分からん訳でしょ。倉庫で食べるだけ食べてから持つてきて交代して・・・色々やれた。あの頃ね、イギリスとオランダの軍隊がおつたが、インドの兵隊もおつた。英国の植民地だったかからね当時は、だから向こうの兵隊がおつた。イギリス兵隊の他にインド兵がね。缶詰なんかを運んでると、彼らに見つかつても、缶詰を分け与えるとだまつてくれるんだよ。だから有り難かつたなインドの人はね。

インドの人はね、大きなポーポーみたいなモノ食べるんだよね。(ナンのことだと思われる・宮城注)。それを私らに分けてくれるんだよね。色々、インド人には非常に僕らはお世話になった。それから、帰りはね、作業してから夕方5時6時頃帰つてくるね。大きな、なんというかな。着るものじゃなくて、オーバーみたいなものに、缶詰をこうしていっぱい入れて帰るんだな。はっはっはっは

そうそう・・・ひっくり返して。そうして、兵隊が立っていると困るから、インドの兵隊だったらいけど、イギリスの正規軍だと困るからさ、うまく誘導していつて、いっぱい持つて帰つてたよ。

(能彦) 戦争が終わつてすぐ帰れたのですか。

(金城) いや、帰らん帰らん。

(能彦) 何年ぐらい。

(金城) うん。その後、日本軍の飛行場に行つた。あのね、日本軍の飛行場といつても、日本という国は戦争に負けたけど、日本は実は向こう(ジャワ島)では負けてないんだよね。でも、国は負けとるもんだから。飛行機も全部あるわけさ、向こうね。

ところが、インドネシアの方は飛行機も何も持つてないんだ、あの連中は。ほんで、インドネシ

アで暴動おこって、インドネシアの中でもさ、ジャワ島の中部とか南部とかで放り出された日本人の飛行隊を、その飛行隊を使って彼らは、どんどんあちこち行ったわけさ。僕らも時々これに乗って行ったりしたんだけどね。

で、僕らも飛行場の草刈りや掃除をする為に 30 人ぐらでいで行ったらね、日本の兵隊はさ、戦争に勝っている時と同じ生活しているわけさ。ご馳走もいっぱいあって、まあどうだ、いっぱい材料もあるから。そこらに僕らも中に入って、缶詰から何から本当に贅沢な生活だ。日本人がおる時は。わしらも日本人と同士だからね。

やっぱり日本でもそうだが、外国でもそうはずだ。兵隊は陸軍は数も多いし、食べる物も非常にまずいもん食べて、月給も安いしね。その次、海軍はいいですわな。海軍は船に乗って、3ヶ月6ヶ月間世界漫遊するから。カーギも少し見るだろうし。それから、いろんな病気されんように、いろんな野菜類なんか缶詰とかを待ってるからね。一番は航空兵、まあ月給は高いさ。航空兵は。だから航空隊の所に行けばもう、日本の場合もそうだが、が高いよ。だから、3ヶ月から6ヶ月くらい向こうにおったかな。その時は良かった。毎日ご馳走食べて。

それから、真っ直ぐ帰らんから、また1年ぐらいてしてから、シンガポールに来て、そのジュロン島という所あるよ。シンガポールに。そこにいて、そこに生活しておったんだが、ヤナ家借りてから。帰るまでまだ少しはかかったからな。

僕はタバコをやらなかったから全然困らなかつたけど、タバコ飲む人はえらいかわいそだったね。もう、キチガイみたいだった。あなた、彼らは兵隊が捨てたものを奪い合って取ってね。それもない時はパイアの葉っぱの枯れたものを、これを紙でこう……。タバコを飲む人は大変だった。キチガイみたいになりよる。そこで4ヶ月ぐらのおったかな。

それから、銀飯ぐらい食べてから死にたいと思ったから、帰国した。和歌山に上陸して。DDTかけられた後は、大和の人は今日来たら今日の内にすぐ家に帰るでしょ。でも、沖縄の人は帰る所無いでしょ。帰るとこ無いもんだからさ、もう段々段々多くなって来るわけ沖縄の人が。もう、10名、20名、100名、1000名よ。段々もう、多くなって来るわけ。帰るところ無いんだから。ははは。それで、もう、飛行場の跡を開墾してから農業やろうと言う事で僕らはやっていたわけよ。そこら辺からやってきたわけよ。沖縄の人、集まっていっぱい居るのに、行くところ無いから。

それでも、2日3日後に大阪行ったよ。

大阪で8ヶ月間、電信柱を全部ちよん切ったりして薪をつくった。みんな料理に使ったりしたでしょ。朝4時頃から起きて、5、6時位のまで、売ってまた帰りよったよ。それから、それから何とか1年半かからん、沖縄に帰ってきたかな。

(能彦) 沖縄は、どこの港に。

(金城) 那覇に来てね。

(金城) うん。那覇に来たらね、おお、その人は色が黒くてね、その、インドネシアとかああいう土人の顔をしたのが、いっぱいおるんですよ。これはどこの人かと。いっぱい居るのは。不思議な、これ全部南方の土人が来たのかと思ったら、沖縄の人なんだよ。色も黒いし、カーギも悪いしみんな。南方の土人が来たと思ったら、なんちったら沖縄の人なの、みんな。

それからまた、中城のある……

(能彦) インヌミ？

(金城) うん、あそこでまた、みんなまた、DDT カケられて。それで、自分の行くところある人みんな帰るわけさ。奥の人、僕は国頭だから、すぐ帰れんからさ、1泊泊まってから名護、明くる日また奥に行った訳だ。……辺戸とか何とかいう。

(そのこ) 歩いて帰ったのですか。

(金城) あんな遠いところ……トラックさ。トラック。アメリカのトラックよ。あの時はみんな、トラックの運転手は金持ちでしょ、みんな。

(盛健) 今度は、秀仁さんがいつも話す、国頭村奥の共同店の奨学金制度、奨学金があったから学校へ行けたんだという話を少し聞かせてもらえれば……。

(金城) 学校、奥の共同店の学事奨励の。そうね、これは本当にねえ、まあ、沖縄にもどこでも、そういう風な考えを持った所無いだろうし、県でも無かったですよ。

これは貸し付けるものもあったし、ただやるものもあったし、僕らはね、10円かな。まず学校に入ったら月5円、月5円はくれた。その当時の学費はね、大体15円ぐらいかな……、15円。親父から15円送ってもらえばさ、その内の2円を、授業料、何ていうかな、授業料をさ、学校の、2円を払って、あとまた今度は下宿料が8円、8円だった。あと2、3円、これは自分の鉛筆や、帳面が、あん餅かったり、それに使って14、5円だ。その時に5円を共同店からもらっていたら大きいですよ。しかもあんな、那覇から遠く、陸の孤島と言われたところですね。そこから那覇まで行って学校を出るといのは、これはもう、大変ですよ、

昔は。私たちはね、奥からあそこまで歩いてきよったんですよ。塩屋まで。塩屋まで歩いて。何も無いんだわ。車も何も。奥の坂道登ってさ、部落の直角に登ってって、それからまた稜線を行って、宜名真にこう降りて、それからまたずっと行ってまた、ほら、また山登って、トンネルあるでしょ、トンネルの方の上から行って、下にも降りて、あれからまた、丘に道があった、宇嘉からこう行って、それで与那の、チョロチョロ水が出る所があったよ、あそこで弁当と。それから、夕方になると塩屋に着きよった。塩屋に着いてね、学校のそばでこう立ってたら、サバニ場に乗って、5銭かな、4銭かな、5銭で乗って、向こうの白浜。

あの辺りトノピャーと行ったんだ。今白浜。それで、定期便というのは無いから。その時分、乗用車にのったり、押し込めて、上は3名、4名なのに押し込めて5、6名のせて、荷物。そこで、ゲンキチそば屋というそば屋があって、そこでそば食べて、もう、船が来なければ、もう泊まらんといかんわけだから、で、遅く9時、10時頃来たら、それ乗って名護まで行って、名護で泊まって、明るる日僕らはまた、那覇に来て、那覇でまた1晩泊まって、泊まったの。あそこの、あのおばさん、だれやね。そこから僕は、逆に汽車乗って嘉手納までよ。1時間14分、1時間14分。それで行きよった。あの頃は本当に。

(盛健) あ、塩屋まで歩きよったんですか。

(金城) ……塩屋まで……。

(そのこ) 一日で塩屋まで？……。

(金城) 3銭だったかな、4銭だったかな、3銭だと……。

(そのこ) そうだね、車でも20分だからね、あの、塩屋を渡る、通ったら。

(金城) くり船よ……。

(盛健) 与那で、昼飯？

(金城) 昼飯は弁当持ってあそこ、あの、与那の下のちよろちよろ水のところ、それから、山登って、トンネルのトンとかないんだから。山登って、ずっと行って、また今度は比地に着きよった。比地から辺土名まで。

戦後もだよ。戦後も、僕は、辺土名まで往復。僕が学校の時に。奥から朝早く出て、1時頃の会議に出て、2時間3時間位で会議が終わったら、またその足でずっと僕は奥に帰りよったよ。往復。辺土名往復、歩いてよ。しょっちゅうこれやってたよ。そうしてまた宜名真の下登って、そうしたらもう後ろから夕日が……。

(力人) 宜名真から上がったから……

(金城) 登って。宜名真。学校があった。山の中腹にな。うちのいってつななんかはそこに行きよ

った。それだから、奥にくるのはもう、久しぶりに。幽霊が出そうなところあったでしょう、あそこからこう越えて……。辺土名往復しよったよ僕はいつも。

(盛健) 今だったら考えられないですね。

(金城) 考えられない。

(力人) けどこの、奨学制度の話の中で、非常に不思議なのはね、五郎(弟)さんが、あんな時代に中央大学に行けるといのが全く考えられないんだけど、どういう事なんですかね、これは。

(金城) 中央大学は10円。(奨学金の額は) 大学は10円。中学は5円。だから僕は5円まででしょ。弟がおるわ。あれ三中だからさ。そして僕らは卒業して、彼はまた今度は中央大学行ったから10円あるわけさ。資金はね、20円位あったはずよ、何といひかな、入学資金といひのは。中学は10円なる。入学資金10円。その他に、自分で借る方法あったわけさ、別にあった。これは卒業してから返せばいい。

(金城) 親吉屋の金城肇も三中。ハブにかまれて足がなく、沖縄でできないから大阪で義足を作って、ずっと義足をやっていた。

(力人) この人が金城邦和さんのお父さんに当たる人ですよ。

(金城) うん、お父さん。親吉と言ってね。奥の共同店の主任。それで、なんかな、交通不便だからね、山にも行かんといかんから。急性盲腸かかってそれで死んだ。盲腸かかれれば終りだ、もう、あの頃は、もう。

(能彦) 学校は奥の小学校を出て、農林学校、その時は最初は嘉手納……

(金城) ええ、そう。最初から嘉手納、嘉手納。始めはね、うちの頃の農業学校名護に有ったんですよ。名護に3期、4期ぐらいまでね。それから嘉手納に越したわけ。嘉手納には二中が有ったわけですよ。二中が嘉手納に。それで二中と農林はしょっちゅう喧嘩したもんだから、後は二中は那覇に行って農林はそこに残った。

(能彦) 農林の授業料が5円。

(金城) 2円、授業料は2円70銭。

(能彦) 2円といひのは年間?

(金城) 1ヶ月。一ヶ月2円70銭。

(金城) 下宿量は寄宿舎があり7えんであった。1年生は必ず入る義務が有った。

(金城) 2年から、もう外部に出ていいんで、僕らすぐ2年から下宿して、……。

(能彦) ああ、これは賄いつきで、ご飯ついて?

(金城) そうそう。

(能彦) ああ、共同店から月5円あった。

(金城) 共同店がね。

(能彦) これは、奨学金で。返さなくていいもの?

(金城) そうそう。返さんでいいもので。勉強すれば行く能力はあるけれども、人間たくさんおったさ。あの時はね、やっぱり金がないからね、山原ではね。だからそういう人なんかにはまた、5円でも足りない人はまた、別に借りられたわけさ。それは出来たわけさ。別個でね。入学金としては10円だったじゃなかったかな。その他に入るときに。

(能彦) これも返さないでいい?

(金城) これも返さんでいい。

(能彦) じゃあ、奨学資金と入学金と、あと、別に借りられるものがあったんですね。

(金城) 借りる分。それは借りるのは別。借りるものは利息は付いたんじゃないかな。

(能彦) これは全員に有ったんですか。

(金城) 全員に。いや、借りたくない人はいたよ。あの頃はあんた、山原で農業して、山行って材木を出して、これで自分の家族の生活しながら、昔の学校に出す余裕ないですよ。(進学した人は) 奥なんかは多いよ、金があるからね。国頭の部落の人は多かったですわな。

(能彦) じゃあ、これが有るから進学出来たわけですね。

(金城) ああ、そうですね、そうですね。大体ね。

(能彦) 戦後は、貸付だけですよね。

(金城) 戦後、戦後は、ない、有ったかな。分からん。

(盛健) 無いと思う・・・分からん・・・戦後は貸付・・・。

(金城) 一回きりやったかな、有ったかも分からんね。

(能彦) それで奥は、色々人材がたくさん。優秀な人がたくさん出たんですね。

(金城) あのね、やはり、昔は、奥はずっと、後ずっと後から学校ができて。初めは辺土の小学校の奥分校で1年、2年生は奥で、後は辺土名に通ったんじゃないか。高等科校というのはみんな辺土名に行きよった。

そういうふうだね、自分の部落だけで集まって勉強すれば、みんな怠けて勉強しない。同じ人間ばかりだから。ところがやっぱり、他所の部落と一緒になればね、これは勉強しますよ。だから、辺土名の学校に行ったのが、きゅうあんタンメー(宮城久安)とかね、シンエイさん(宮城親栄)ね。チカコのお父さんとかね。それからたくさんおった。あの頃の人たちはね、みな優秀ですよ、みんな、大体ね。みんな、競争だった。むこう、他所の人と厳しい競争するからね。

(盛健) 辺土名というと、行く場合には、あれだけの道のり歩いて行くんでしょけども。

(金城) あれは、もう、泊きり。

(能彦) 高等科行く人は辺土名で下宿。

(金城) そうそう。いいえ、昔ですよ。これはもう、ずっと昔。もう、今生きとれば100歳ぐらいの人の時代ですよ。

(金城) それから辺戸名の小学校で、奥分校。しばらくしたら、今度、奥の小学校独立したからね。

(盛健) うちの糸満盛正おじいも嘉手納農林ですかね？

(金城) あれは嘉手納農林学校。先輩だ。嘉手納で一番早いのは、明治45年「新門」の上原直勝さん。次が大正2年に糸満盛正おじい。

(力人) 戦後の青年学校の話し。

(盛健) 帰ってきて、戦後、何かこう、青年学校みたいなものが有った・・・。

(金城) あれは実業高等学校で。実業高等学校というやつは1年だけ。

(能彦) 奥にですか？

(金城) いいや。これは沖縄全体。だから、これは戦争負けてきて、やっぱり何として、とにかく何とかして、自分の地域に産業根ざした所の教育をしなきゃいかんという風な考え方だったと思うんですがね。実業高等学校として、国頭村、村で1校。だから、国頭村で1つ、好調に新里全福先生、教頭に安田の宮城定蔵先生がいた。新里全福先生はのちに尊重。それから、奥には分校が設置され、僕がいた。

(盛健) ああ、あの。奥に有ったやつは分校ですか。

(金城) 分校。辺土名に本校があり、奥、宜名真、安田、辺野喜など各初等学校に実業高等学校の分校があった。それで、私と家内の姉の上原和が分校の教員をしていた。宜名真分校には、家内の長女姉山入端敏がいた。

(金城) 辺土名には本校があるわけ。

(盛健) ああ。で、あれば、分校から本校に、一緒にまた研修なんかで。

(金城) 言うとおりの、あそこのところ 11 時出て、夜帰りよった。

(金城) 行ったり来たり。……日帰りである、大体お昼を中心として、向こう出て……帰りよって。奥に来るのはやっぱり日が暮れる。

(能彦) これは小学校を卒業した人が行くのですか。

(金城) 実業高等学校だから、そうね。昔の初等学校 8 年を卒業してから 1 年間。ただし、学制改革で実業高等学校は 1 年で終わり。奥初等学校、奥中等学校が併置校として設置された。中等学校の一期生が昭和 8 年生の宮城悦生、宮城啓など。

(能彦) 1948 年からですか。中学校できたのは。

(金城) そう、僕あそこに (教員で) 3 年おったからさ、2 カ年。それでまた今度は新里全福さんが村長になった。いろんな陳情に県の方に行っても知ってる人誰もいないし。大宜見あたりは、なんというかな、大工さんとかいっぱいおってね。県庁にどンドン人を排出しとるんだよ、課長も友達とか。だけど奥は誰もいないわけ、奥って頼れる人が誰もいないもんだから、それで、やはり頼れる人が県にいた方がいい、君は那覇に出て活躍した方がいいという勧めもあって、教員を辞めて那覇にでた。僕は奥で学校を創ったばかりなので、そういうことはできないと断ったが、心配すると言われ、後ろ髪ひかれる思いで那覇に出た。

例えば、交通局長の庭に行つて草むしつてやつたり、おべつかつかつたり、いろいろやつた。それでとにかく何とかしてもう、那覇にでていくために。当時、国頭出身者で県にいたのは、悦生さんのお父さんの宮城親也さんと宜名真の宇良宗四郎さんと僕の 3 名。

(能彦) 那覇に行かれて何をなされました。

(金城) 教員 3 年して那覇に出たから、ずっと僕は、那覇に来て昔は琉球政府になる前では、これは琉球農林省をいうのがあったんです。琉球農林省、大げさな名前だな、琉球農林省というのがあって、とうとう、向こうのあそこは

(盛健) 崇元寺にあった

(金城) 崇元寺の上にあった。そこでは……総裁は平良辰雄。琉球農林省の総裁、そしてまた農政局というのと、農林局の人で農業改良局というのは、東大出てきた大島に人だったかその人が、それから、農業改良局長は、後から総裁になった船越さん、これが 1 年したらすぐまた、琉球臨時中央政府というのに変わったまた。琉球臨時中央政府というのは総裁は、誰か、手の切れた……

(盛健) 比嘉秀平 (ひが・しゅうへい)

(金城) 比嘉秀平、それ、琉球臨時中央政府というのを 1 年やっていた。3 カ月なるかね、それから琉球政府になったわけさ、琉球政府なって、今のこの県庁のこっちに来て。琉球政府にきてやつたら、比嘉秀平さんの前では、それと、……これから経済局の発展、西銘 順治 (にしめ じゅんじ) の前に、あと忘れていた人がおるさ、流銀の総裁、頭取だったな、豊見城の。

(盛健) 久手堅……

(金城) あの方が、初代、その次に政治的な関係があったから、西銘 順治がいた。西銘 順治とはまた一緒におつて、僕らは 3~4 年おつて、それから、西銘さんは、またまた市議になって、それから今度は那覇市長になったのかな、那覇市長になったから、呼ばれて向こうにいったわけさ、那覇市に。那覇市になって 3 年ぐらいかな、それからまた、選挙にまた負けて。台湾から沖縄に来た……

(能彦) 屋良 朝苗 (やら ちょうびょう)

(金城) 屋良 朝苗との選挙に負けて。屋良さんは西銘さん先生だから負けてよかったと言つた。それでもう市長も辞めて、今度はまた市長にまた古堅町長立候補したら、でこれでもまた負けて。

僕は、条例上は別に辞めんでもいいんです、三役だけだから。助役と、市長が辞めれば。部長クラスは何も辞める必要は何もないんだから、それで僕ら、これは今まで白、白、言っていたのが、むる（みんな）、あちゃ（あした）から黒、黒、これはおかしいんじゃないか、と言って、僕らはすぐ辞表を出したんです。いかんということ。

それでやったら平良良松がしばらく待ってくれんか、というから。どうしてかといった、あんたもう当選したのに部長クラスの人事はもう決まっているんじゃないかといったら、いや決まらんと言う。それでも自分たちはやらんといった。それじゃあ名前だけ書いてくれというから2週間あって、提出は正月まで、27日か、18日くらい名前だけ書いてくれというから、いいだろう、それじゃあね名前だけ書いて僕らは出勤しないでくれというから、僕らは出勤しなかったわけ僕らは。

その間は、僕は遊んでいた。内の家内はヤマトを見たことなかったもんだから、最後の見納めにヤマトに行こうと、2人鹿児島に行つて、船で。あのときは飛行機なんかないから、船に乗ったら、西銘順次さんの弟で、島尻にいる登さんと一緒になり、特等の部屋を唯でとってもらった。僕は一等の切符買ってあったんだが、特等といったから、アッサナーもう全部テレビも入って、立派な部屋に、それと今度はまたコーヒーの時間にも何回も。高級船。

鹿児島に着いて船から下りたら今度は、ウイスキー3本、ジョニ黒、3本持って来てから、登さんが飲みなさいとってくれよった。そうね、とって、それでホテルも登さんが紹介してくれて、あれは海軍兵学校の時の同級生。その人は後で死んで、奥さんがやっていた。で、そこで僕らは2人は泊まって、一週間して帰ってきた。

もう、行かんつもりだったから市役所には。辞令だっていうから、どうせ行かんでもいいよ郵便で送ればいいよ退職届はと思っていた。行ったら、秀仁さんあんたはヤマト行ったそうだな、といわれたから、戦争（選挙）に負けて頭おかしくなったからと冗談いつてからに。

（盛健）悦夫先生もいつてたように、私なんかが県庁には入れたのは、秀仁さんのおかげでもあるんだけど、とにかく奥に生まれて、奥の人のためにしなさいというのがもう、ひとつのアレなんです。悦夫先生からも、そういう風に教えをうけているもんだから。

（能彦）この前奥の資料整理してたら、ちょうどたった3カ月しかない臨時政府からの表彰状が奥にあつて、あれ、とても貴重ですね。農業の表彰状。比嘉秀平の名前で表彰されてます。

（金城）臨時中央政府って3カ月しかなかった。琉球農林省というのは1年ぐらいいかな。琉球農林省から、今度は琉球臨時中央政府、琉球臨時中央政府、というのが、これは・・・その前には群島政府というのがあったからな、4つあったわけだな、沖縄本島、宮古、八重山、大島、だからあの、立法議員というのは大島から来ている人もたくさんいた。

キャラウェイ高等弁務官のいちばん可愛がっていた人が大島の、あの人の秘書だったから、あの人は英語もうまかった。あの人は結局最後まで、キャラウェイと仲良くやっていたから。ぼくはキャラウェイとは会ったことはあった。秘書があんた英語は分からん、ああ全然駄目だつていつたら、キャラウェイが部屋から出て来よった。あんた時間あると聞きよった、この人英語できないから、通訳してくれる？って、1、2回ぐらいい高等弁務官と僕は、通訳をとおして話したけど、あのときは怖くて誰も1人では部屋に入れなかった。

（能彦）キャラウェイはやっぱ威張ってましたか？

（金城）はい、（笑）。あの頃はたいへんだつた。みんな怖がっておったから。

あのね、キャラウェイの考え方は、さとうきびは暴風のたんびに倒れて困るから、沖縄のさとうきびはつぶして、全部畜産でもってこようと考えていたよ、畜産で。キャラウェイの考えは畜産だった。牛や馬は餌をやって、クソたれたらこれを肥料になるといつて。だけど、農協なんか全部反対した。そしたらアメリカから5名の大学の生徒を連れてきて、沖縄を見せて、それで、

本格的に畜産にやろうという考えでやった。だけど、沖縄のみんなに話しを聞いたら、キャラウェイの思った通りにいかんで、逆になったわけ。それで彼は帰ったんだといわれた。

北谷に新都心があるでしょう（ハンビー）あれヘリコプターの基地だったんです。あそこから僕は沖縄の離島全部回った。ヘリコプターで。行くときは、生命の保障はしませんがアメリカに言われ一筆書いてから、行きよったんだがね。それで、畜産関係全部見てまわった。

軍政府の、与那原の人だったか、二世だったかが僕の通訳をして一緒にヘリコプターにのっていた。ある時は国頭の辺土名も行った。桃原辺り、名護とか、伊是名、伊平屋、座間味、粟国、久米島とかどれくらい回ったかね。

ある時、粟国で落ちこちたよ。小学校の庭に降りるつもりだったんだけどね、そばに電柱があって、それに引っかかって落ちているわけよ（笑）ヘリコプターが。それで、故障で駄目になって、それから命拾いをして、それからまた飛行機呼んで帰ったんだけど、そういうふうに、キャラウェイという男は、とことんなんとかして沖縄を変えよう、という考えを持っていたんだがね。

（盛健）あの人は西部の出身だったかしらんですね。西部劇にでてくる牧場の人。初めて聞いたんですやっぱりひとつの自分の考え方があって。

（金城）あの人は政治家じゃなくて、学士号、博士号もたくさんもってるらしいから。

（盛健）やっぱり、畜産振興・・・牧場したいがための何かひとつの考えが・・・

（金城）とにかく、特別にしたいわけさ、もう暴風のたんびに補助金とか、何とか、・・・

ああ、もう大変だ。だから、僕、話し合い1時間もやって帰ったら、こっちからも質問もどンドン、どンドン、畜産も詳しいから、僕はやっぱり今いったような話しをして、沖縄の歴史を、こう、こう、こうでって。さとうきびは全滅するが、これは倒れてもまだ生き返る。それから収穫しても、それからまた今度は切ったものはまた牛の飼料になるし、それから草、肥料だって、クソを拾ってこうしてやれば循環系だ。そういうのを僕は1時間くらい話しをやってよ。やったら、ああそうか分かった、ということ。

朝の6時35分に、農家の皆さんおはようと、僕はやっていたんだよ、ラジオで。農家の友というのを。キャラウェイは帰りがけ入り口まで僕を送ってきて、「ミスター金城、あなたのラジオ6時35分あしたから聞きます」と、聞きますといったから、アンダグチ（リップサービス）だろうと、笑ったよ（笑）。

（能彦）すごい勉強になります。でも、キャラウェイと直接話した人の話、初めて聞きました。

（金城）（笑）キャラウェイ会えないさー、怖くて。太田主席ですら会えない存在だった。

ぼくはね、普及委員、試験場なんかで講習会みたいなもの行っておったわけよ。そしたら電話かかってきた、局長からすぐ電話かかってきて、「高等弁務官に來いといわれてるからね、君、行く前に僕の所に来てくれ」と。あれはビックリしているわけさ、もう、でーじなとん（大変だ）と思って。それで行ったら、あれは僕が帰って来るまで、チムどンドン（ドキドキ）しているわけ、（笑）もう、でーじなとん（大変だ）って。

（能彦）復帰の時は特に何か・・・

（金城）復帰の時に僕は国場組だ。

大島の復帰の直前に大島に行っていて、大島から帰れなくなったことがある。滞在中に大島が日本に復帰したから。沖縄は琉球で外国になったから、パスポートが無いから出国できない。それで米軍が連れ返すために来たんですよ。沖縄が復帰する時じゃなくて、大島が復帰する時に。あのときは、大島が復帰をする時に、お祝いに琉球政府から行くわけさ、比嘉秀傳、比嘉秀平のおじさん。この人は副主席だったから、その人と、警察課長と、それから経理課長と。今は死んだが、久米島の立法議員の議長をしておった

僕はその前に、災害調査の調査のために沖永良部に行っておった。あのときの沖永良部はずっと

沖に船を泊めて、1時間ぐらいかけてくり船をこいで島にいきよったんだよ。そこでまたもう3週間、部落のあるだけ全部回って災害調査をしたんです。あそこはもう全部名前が沖縄みたい、国頭とか、誰が島尻とか、誰が宮城とか、そこを全部回って災害調査をして、那覇に来たら、すぐに課長がまたもういっぺん大島に行ってこいっていうんだよ、僕に。

帰ったばかりなのにまた大島の本島に、いろんな災害、ジャガイモの苗とか、何とかかんとかで内容を調べてこいと言われた。行った時は大島の復帰の直前だったんです。

むこうの方にはすでに、日本の税関とかそういう人が全部入って来てたものだから、復帰の前の日、25日の11時59分59秒までにあの港を出ればいいんだけど、出なければ、もう出られんわけさ、日本になっているから。ところが、比嘉秀傳さん、これまたのんきなお兄さんで、いいよ心配すんな、って言って。

結局、復帰の日になってしまって。それだから米軍に連絡したら、軍の方から大きな船LSTが来たわけ、これが、沖縄の船だったら港には入れないけど、アメリカの船だからこれはもう止めるわけにはいかないでしょう。アメリカの船に乗って帰ってきた。あの時は大みそかだったのか、波がすごくて、朝起きてみたら冷蔵庫が全部ひっくり返っておった。朝起きてみたらトビウオが船の中にいっぱい入っていて。

ああゆうふうなことがあった。奄美大島では、日本復帰ということで。

(盛健) 力人さんがいつもおっしゃっているように。やっぱり、奥に生まれてよかったという話しも聞かしたほうがいいんじゃないかな。分からんからね、よその人には。

(金城) これはねえ、僕はいつも口癖のようにいつも言っているのは、奥に生まれて、奥に育って、奥で成人したことを誇りに思っている。奥のこと、ちゅーばーふなーになるけどね。奥にはどこの部落にもない、ひとつの文化があるから。例えば、学術奨励なんかいろいろあるでしょうね、それからね、何か100キロあまり離れた所にあんな辺りな所に海もあり、山もあり、川もある、これは自然の見た目の豊かさというものはあるけども、生産性の非常に低い部落でしょう、あんな石岩盤で何にもできないからね。そういうふうな所で、自然環境に調和するところの、ひとつの部落作りをやったということ。

例えばさ、イノガキね。それから今度は何というか、一日、十五日にはなんとかして公休日にして、婦人会の方々が部落の掃除したり、青年は運動会みたいないろいろやるとか、もうとにかく、何とかかんとかいう色々なことをやっている。それから普通の農業はできないけどお茶なら最適です、お茶の園があるとか、それから家畜関係だったら僕らはまた専門だけど、いろいろな種牛を入れて、これをひとつずつ飼うとか、いろいろあるんです。

とにかくよその部落ではない、奥の部落しかやってないことが多い。これは奥の先人たちの素晴らしい英知と、努力というものだ。私たちはその人々の創ったところの文化の中に生まれて生活したということは、非常に誉れに思っと思うんです。

(能彦) やっぱり仕事するときは、それが支えになりますか。

(金城) そ、そうそうね、例えば奥の人は貧困の差というのがあまりないんです。よその部落でいえば、ヒンスームンとエイキと(貧乏と金持ち)非常に落差があって。奥は、学校へ行っても、子どもは遊ばしても、みんなワーワーして、決してこれは金持ちだとか、これは貧乏だとかなんとか、とかこういったようなことがないように思う。小さいときから僕らそういうふうな育ってきている。だからそれが部落から出てもみんな同じような気持ちで結局、皆同じさという風に。その代わり欠陥もあるかもしれないね。みんな同じような気持ちだからさ。勉強してこれより偉くなるという気持ちは無いね。みんなね。それが欠陥なのかもしれない(笑)。だからみんな悪かった。同じ人だと思った。これ負かしたらこれより上になる。偉くなろうという欲張りはなかった。みんな同じだから、はい、はい、とって。

(盛健) きょうは、今までは私たちもあまり聞いたことのない話を聞きましたんで、よかったです。

(そのこ) わたしも初めて聞いた話です。

(盛健) きょうは素晴らしいお話し聞けて、ほんとに。

(能彦)ほんとにありがとうございます。

(力人) 1950年代か、60年代かも、50年代後半ぐらいですか、何か米軍にだけが特別な野菜がありましたよね、清浄野菜？

(金城) 清浄野菜、いろいろ人糞とか、何とか付かない野菜。アメリカは衛生的なものだから。

(力人) どういうふうにして生産したんですか、生産の方法というのは。

(金城) これは指定されている場所、指定地域。例えば伊計島なんかでね。水肥を使った。人糞をかけたり、堆肥(たいひ)をかけたりするのをアメリカは嫌うから、だからアメリカは科学肥料だけをあげて栽培する。これは結局契約栽培だから、もうなにもかも決まっているわけ、それで種まきからルートまで。

(力人) そういう野菜があるわけですから、例えば肉とか卵とかも指定があったわけですか。

(金城) 生野菜を食べるもの国頭も名護あたりかな、辺土名辺りも指定されて、無農薬栽培の「清浄野菜」と言っておった。

(力人) 私は沖縄水産の出身だが。例えば、昔の琉水のあるミーグスクの、あの辺に琉水の冷凍庫があったんですよ。その隣にパイン缶詰の工場があったんですがね。あれ魚だったかな、パイン缶だったかな。その他にも、そういうこの野菜とか肉とかいうこの保管する場所があったんですか？

(金城) いやあれは、軍の指定する所には、やっぱりちゃんとあるわけよな。

(盛健) 力人と2人たまにインドネシア行くんですが。

(金城) 行っとるか。

(盛健) 行くんですよ。それぞれあの。僕が来るのは、北セルビスという。

(金城) セルビス。セルビス。

(盛健) セルビス。さっき言ったとおりに、ヤシの木があって本当、昔の本当に全然変わってないと言われて行って。

(金城) 行きたいと思ったんだが、行けなくなった。もう。じゃ、行こうよって言ってもそうともいえないはずね。

(盛健) (奥の) サバンナーと一緒に。それで全部、丸バイシ(裸)で子供たちが川で泳いでるわけですよ。マンゴーとかこういうの、こうつついて採って食べてる。

(金城) いやーあの頃はね、まだまだまだいいよー、まだまだ。だからね。朝起きてもね、頭から腰まで手をこうして腰巻きでしょ。

それで、朝起きたらみんな勝手に、川の両側並んでみんな糞垂れてるよ。そして後ろの方でも洗濯しているよ。

あの頃だよ、もう今はそんなにないから昔はね。

(力人) 先ほどのお話はあれですか、ニューギニアですか？行かれたのは、場所は。

(金城) 僕な？インドネシア。インドネシアのジャワ。

(力人) 捕虜になったのはジャワ島のどこですか？

(金城) ああ、僕はね、僕はあの時は軍人じゃないからさ。僕は、満州のときは軍人だけでも、ジャワにいた時は会社ですから、今言ったようにいわゆるマラリアの薬を栽培する会社。世界の92%はジャワで生産されとるマラリアの薬。それを占領することによって日本は非常に有利になるわけさな。その時にドイツと日本は、同盟国だからね。向こうは潜水艦でインドネシアまで

来て、日本からいわゆる記念に持って帰ったっていうふうな話。

ジャカルタでもしばらくは半年ぐらいおったし、それから、スカボビというところ。それからね、あちこち寄ったな。サラテガというところ。サラテガというところはね、標高600メートルごろのところだが、下の方にはまたスマランというところがあって。

これはね、あんた方に話せば嘘みたいなことだけでも、もうオランダ人が・・・、日本人は貧乏だからね、貧乏性だから、ちょっとでも木々を多くするには、まず木々を生産してから、道路をつくったり、色々つくったり、いろいろ整備をするんだよな。ところが向こうはね、初めからもう計算して、これ何をするところ、これにケナを植えるとか、これがコーヒーを植えるとかね。道路からつくる。電話を引く。それからまた今度は、田舎だから今度はダムがある。ダムをつくって、そこに水力の発電をつくって、こういうのをやる。また人、ジンプンを集めといかんから、少ないから学校をつくる。また巡査を置くとかね。いろいろ。いろいろあってそういったものを全て至れり尽くせりしてそこで5、6千人住んどるんですよ。で、大きな住宅とかも、今の知事公舎2倍ぐらいあった。

僕は一人でそこに住んでいたよ。大きいところに。飯炊きもおるし。それから夜も10名ぐらい守衛みたいなのもおるし。それから洗濯するのもおるし。もういろんなのがおるわけね。

(盛健) 僕らは歴史的認識不足が薄かったんですよ。例えば戦争の入る前はインドネシアはオランダ領だったこと。

パラオからセルビスにウミンチュが渡ってるんですよ、戦争前に。向こうでビトゥンというところなんですけどね。向こうで鯉節工場つくって。僕らが認識不足だった。秀仁さんなんか直接関係ことを初めて身近に感じましたよ。40年オランダ領だったのが、戦争が起きて、わずかの間に行かされて、閉じこめられて帰れない。今でも向こうにもいるわけですよ、たくさんの方が。ウミンチュが。

(金城) あのね、向こう(インドネシア)はやっぱり日本の兵隊のお陰で独立を勝ち取ったわけですからね。オランダ領、イギリス領どこでもそうがね。だから、戦後、日本人がインドネシアのことを全部調べてみたら、そこに日本の兵隊がまだ残っている。

例えば向こうの伍長、軍曹というものは大尉か中尉ぐらいだけど、その人たちは、元は「兵補」。兵隊の補欠の「補」、兵補。

日本の兵隊は、将来の独立に備えて訓練したんですよ、むこうの人を。「兵補」にして訓練して。そういう訓練したもんだから、それを訓練した連中がそのまま残って、まだそこにおるんだね。むこうのお嫁さんもらって。今でもおるさーね。

(盛健) だから、我喜屋とかもうなんかもう、ウチナー苗字がたくさんある。みんなうちな一顔してますよ。

(金城) そうだね。

(力人) マナードを中心とした名簿があるんですよ。30名ぐらいの。おそらくウチナーンチュだろうという人達の名簿がある程度明らかになってくるんですよ。そしてその人達がこの現地の人達と、女の人と一緒にあって、1人とか2人とか4名とか子どもがいて、90名ぐらいまでのも迎えることができますよ。実は今、この話になったから、ちょっと言いますけどね。今日の4時頃、衆議院の西銘恒三郎先生から電話あって、「いつか一緒に行こうな」って。私その前に、2カ月ぐらい前にちょっと先生に会ってお願いしてたんですよ。今の件で。西銘恒三郎にも関心持ってもらって、「一緒に墓見に行こうな」と。「現地に見に行こうな」ということになってるんですよ。

(金城) どの墓。

(盛健) いや僕らはね、ビトゥンに日本人墓地作ってるんですよ。力人が募金集めて。

(力人) 琉大の同期生。南風原のですね、照屋さんと言います。琉大の先生。照屋なんかというの。なんとか研究家、何と言った？最近。

(能彦) 照屋善彦？

(力人) その先生と一緒にいったわけさ。奥さんの関係でね、向こうの。あの人の奥さんはセレベスの生まれで、当時の住所を尋ねたいということで行って、行ったら、なんと病院の名前がそれで、そこにカルテが残っていた。

先ほど、私がどこで捕虜になったのか聞いたのは、照屋先生の奥さんが、マカッサル（ウジュンパンダン）というこのセレベス島の南の方にあるんですがね。その病院で生まれたわけ。今言うルートを辿りに行ったんですかね。

マカッサル（ウジュンパンダン）辺りの人達みんな集められたんですよ。ジャワ島は分かりませんよ。スラバヤかね、バリ島なんか、あの辺の人達も集められて、オーストラリアに、捕虜に連れて行かれたんです。

(金城ヒデ) だけどよくカルテが残ってたもんだね。

(盛健) 日本がインドネシアをオランダから奪ったその隙間の2、3年というのは、あまり分からなかったんですよ。今話されてわかりました。戦争前に、テレパラオなどへ沢山行かされているんですよ、ビトゥンに。インドネシアに。

(金城) 沖縄の人使うさ。漁業者だのに。

(能彦) インドネシアで島ぞうり作って売ってるのは沖縄の人って聞いてたことがあります。

(金城) 沖縄の人はね、東南アジアどこ行ってもおりますよ。大体、ウミンチューはね。またもう1つはね、沖縄の人は、ヤマトンチューよりもね、ああいうところの土人とかのところに来ると非常に近親感があるんですよ。これ僕らもそう思うんだがね。

普通ヤマトウの人は、(東南アジアでは) ちょっとひとこと威張りたいところがある。でも沖縄の人はそうじゃない。同等にね。「ヤー、ヤー」と言っている。

僕らもそうだった。やっぱり僕らはああいう中にいても同じ。当時、若いのがあと2人ぐらいいたんですけどね。僕らが飯食うでしょ。したら、僕だけ「座れ、座れ」って彼ら(現地の人)を誘うんだよ。座らんけどね。彼らは酒飲まないか。でもね、近親感があるもんだからよね、自分らと同じだという気持ちがある。だから(現地の人は)全然、西洋人よりも日本人に対しては親しみある。今でもそうだと思うんですよ。ね。なかなか面白い。

(盛健) 面白い。汚い話で面白いはなしがあるんだけど。日本はこれだけ進んいて、今はないけれども、昔、私なんか学校行ってた頃と変わらないじゃないかと思うことがあって。

例えば便所ですね。むこうの便所には石を置いてあるんですよ。便所に。便所に石を置いて、用が済んだらその石でお尻拭いて、その後石を水で洗うんですよ。水は流れていて。「これ、置いておきなさい」って、意味分からなかったんですよ。山の中行った時に。私らの昔のあのはじき石と同じ、尻拭くのはちょっと違っているけど。今でもそれと同じことやってるんですよ。

(そのこ) あの丸い玉石みたいなもの……。

(力人) これ、合理的な水洗便所ですよ。

(金城) 奥の人は昔こうやっていたんだよ。

(金城ヒデ) 小石置いて、また次々と人が使うわけね。

(そのこ) 他人が使うかどうかわからんけど、家族はどの石って決まっています。

(金城ヒデ) 自分のもの決まってるわけよね。

(金城) インドネシアはね、水が豊富だから尻をあらうんだよね。

(力人) 例えば、今言うビトゥンのところも、水産学校で校長室に校長専用のトイレがあるんですよ。そこにもおんなしように、タンクがあって、水タンクがあって同じようにあるんですよ。

(盛健) へー。僕らが行った民間には1つもない。

(力人) 案外、近代的な学校ですよ。

(金城) トイレの下にはね、ちゃんとコイがおるよ。川が流れておって。それ食べるんだがね。臭くて、僕は刺身食べたりはしない。

(力人) 今、今度一緒に行きますか。今度、西銘恒三郎先生が、「宿泊に行こう」って言うから、行きましょうよ。

(金城) 是非、一緒に行きたいと思う本当はね。それで、もう60何年なるからね。……どこに行ってもあまり……

今考えたらさ、向こう行って最近はだんだん考えてくるんだよね。いろんなこと思い出すんだよ。まだ60年。ああ、あの時のあの人は生きてるのかな、どうかな。もう死んだ、死んだ。全部死んでると思ったみんな、あのとき。もう60何年だから、僕らがジャワから来てからね。

(盛健) ああ今元気だから大丈夫って。ワッタートゥジもいるし、恒三郎も行くんだったら一緒に。インドネシア。昔の本当。もう、1940年代のインドネシアとあんまり変わってないんじゃないかと思えますよ。山の中だったらね。

(金城) 同期生、全部が死んで、もう死んでいないわけさ。そんなまで長生きしないからね、向こうはね。こっちみたいだね。ぼく一人がさ、100歳なるのにな。

(盛健) いやー、この年過ぎたらね、やっぱりお互いの全くこの、安心しますよ。(むこうは昔の奥と全く同じだから)

(金城) 僕らも同じよ。5、60キロぐらい山の中に農園があるからね。

(盛健) ああ、1回本当、時期取って僕らも一緒に行きますんで。

(力人) むこうで、昔みたいにマルバイ(まる裸)になって川にとびこむさ。

(盛健) お互いだったら別に安心ですよそんなの、うん。1回行きましょう。

(そのこ) 力人先生なんかは、もう台湾ではほったらかされても帰り切れるから大丈夫だよ。

(盛健) マンゴーが、パパイヤとですね、一番おいしい。あれは本当の果物ですね。

(力人) パパヤーが最高だからね。

(金城) 台湾はもう、一番近親感があるよ、台湾はね。台湾とね、台湾と朝鮮と比べたら、僕らは満州におったがね、朝鮮の人には運転手たくさん多かったけどね。ちょっとこの性格というか、感情の起伏が大きくてね、ちょっと。でも、台湾の人というのは、非常に近親感がある。近親感がある。これは、政治的な恨みもあつたはず。

台湾の方は占領は大成功ですよ、台湾はね。もう今あれだけ台湾が本当に抑留しても充分な力持ちよつたのは、これは日本のお陰ですからね。あの田んぼで米作ったのって全部日本でしょ？もう全部だから、あそこの基本的な(社会資本を)作ったのは全部日本だからやっぱり、台湾の人は日本様々だ。台湾が一番いいところは。僕らはだから、もし戦争勝つとれば、ジャワで終わって。一応は、まだ独身だから、帰って来れば将来の生活は台湾でやりたいって、その気持ちで持ってたずーっと。台湾っていいところだなー、ってね。

(能彦) 戦前は、台湾に行くのに憧れていたとよく聞きますが。

(金城) ああ、戦前は台湾に憧れた。僕は台湾において、それからジャワに行っても、どうせ定年になったら帰ってくるのは台湾だって気持ちはあつたからね。沖縄の生活、台湾の生活、そういう気持ちあつたな。

あいやもう、台湾というのは品物も豊富ですよ。戦争中にも、砂糖とか米とか何とかいうのも、もう何と言うかな、日本帰ってくるのも大変でしょ。ない。

僕らはジャワに行くために6カ月ぐらい前に台湾から出て、それから東京でずっとホテルで、ホテル住まいでずーっと仕事をしてないでブラブラしながら、日本の兵隊の命令待ってるんだよね。

その間、本当にもう米もなけりゃ砂糖もないしビールもないし。で、僕ら台湾行ったときには、外国の旅費で来るもんだから、お金はたくさんみんな持ってるわけさ。あの辺と、ソウルに行く時もあるわけさ。台湾はもう、田んぼも多いしね。もう。

(盛健) 台湾の高雄には日本人がつくってものがまだのこっていると聞いたんだけど。

(金城) あそこにはね、ガランピンっていうところに灯台があるのよ。ガランピンのね、灯台のあの神社があるんだよ、ガランピンに神社があるからさ。一番南の端な。向こうから見えるわけさ。何ていうか。南十字星。南十字星が見えるところがさ。だから、大きなクジラのね、大きなクジラのあごぐらいいこう作ったんだよ、あれ。コウシュンとかで、クジラ捕るこれがあったからね。すぐ近くに。これはもう捕ったらすぐもう。その群れ……。

(力人) ほかのは分からんけどね。つい10年まだ、5年、10年ぐらい前かな、キールンの港のいろんなものは、日本時代のものです。駅も含めてね。キールンの港、駅も含めて。もう日本時代に作ったものがそのまま。

(盛健) キールンは、非常にあれだよな。キールンの側に水産試験場があるもんだからさ。

(金城) キールンのところには、ジュロン島というところがあってね。ジュロン島って沖縄の人ばかりさ。ジュロン島はね、しかし、雨が毎日降るから昼間、毎日雨降る。

(盛健) うちのおじいちゃんなんかは、高雄ですか？

(金城) 高雄の中のコウシュンって高雄市のコウシュン。その後は和歌山にいきよったはずよ。その時は僕はジャワにいていたからわからん。僕が連れて行くか？君は。おじいちゃんと住んだところに。家もある、まだおそらく。そのまま入るとる、みんな。

(力人) (盛健は) 国際人の孫だのに、あれで。

(金城ヒデ) そうだよな。だけど、もう変わってるんじゃない？

(金城) 僕が旗山におる時に宮城久安は警察課長しておった。だからね、戦後、僕見に行ったら、戦後は台湾人の警察の人がみんな入っておった。

(金城ヒデ) 台湾には、琉球政府の頃、台湾に行きました。

(金城) 台湾にはさ、戦後も2回行っておるよ。

(能彦) 僕たちも、3月になんとか高雄行こうと思って。

(力人) じゃ、行きましょうよ、一緒に。先生方は勉強して、我々は遊びに行きますよ。

(金城) 高雄は、高雄いいですよ。高雄はね、この町から、先生、巡航船っていうのがあってね、その向い側に平和島っていう、平和っていうか、あそこに。で、うちなんか、沖縄の人なんかみんなあそこに行くとるわけさーね。

(力人) 観光といいながら、研究やる。

(能彦) いや、いや、もう旅行で。

(金城) 高雄いいですよ。

(金城) あの人いいこと言ってる。李登輝さん。本も書いてるからね。僕は、あの本を読んで感動した。それから新聞にもとき々出るよな。あの人は本当にもう親日家だな。

(盛健) あの人はね、京都大学ですよ。農業経済学じゃないですか？もともと。

(能彦) 去年会ってきましたよ。李登輝さんに。

(金城ヒデ) うちの婦人会でね旅行したの。台湾旅行ね。したら、ガイドさんが男、おじさんであるわけだね。沖縄の人のこととっても褒めて、自分達は小学校のときに上原ショウインという先生に教えられたんだ。八重山の方なんですけど上原先生いい先生だったってとっても褒めるんですよ。だから嬉しかったね。沖縄褒めて。

(盛健) 台湾では全然もう、日本に対するあれはみんなおんなし。

(金城ヒデ) ガイドおじさんだったけども、とっても上手に褒めよった。

(金城) あれだけ立派なものたくさん作ったの日本だもの。

(能彦) 台湾は総督府もそうだけど、「永久建築」で作っているんですよ、全部。お金のかけ方が違いますよね、台湾には、日本は。

(盛健) ずっと前に秀仁さんから聞いたけど、コウシュンの駅は何かがそのまま残ってるとか。

(金城) 屏東を越してね、屏東を越して、潮州のところまで駅があって、乗り合いバスで行ったんだよ。乗り合いバスで行って、僕は一人で訪ねて行ったんだがさ。コウシュンというところはさ、向こうの軍の役所のあるところ。軍役所のだから、おじいちゃん軍役所のあれしておったからさ。民間。向こうの民間もみんな、学校の先生も、管理もみんな……が、海軍の、洋服見たらね。そして、やっぱり帽子もかぶって、向こうの……。

(盛健) みんなが元気な時に行きましょう。

(盛健) 僕は1943年生まれなんですよね。1940から43頃、日本がインドネシアを占領したっという話を始めて聞いて身近に感じましたよ。僕は海のことに関わっているけど、戦争前にパラオから行かされたのはなぜか、僕はわからなかったのです。オランダ領だったのを日本人がとったからだというのがわかりました。そこに漁業者を鰹節工場やるために、たくさん送っているんですよ。

(金城) 沖縄の人はとことん行っとんな。どこにでも。

(盛健) 何でうみんちゅが行ったのかは僕らには分からなかったです。

(金城ヒデ) ああ、なるほど。いや、鰹節を作るために沖縄の人はどこもかも行ってるんだねえ。

(金城) そりゃあもう軍でもどこでも保存食だからね、どこにでも持っていけるわけだからさ。

(金城) インドネシアはね、等高線農法ですよ。同じ高さにある。島がこうあったら山があるでしょ、同じ標高。そうしたら標高0から4、50くらいだったら砂糖きびとか、暑いところのですね、それから約300mまで来ると薬草、600mくらいの所に行くとコーヒーというように、同じ等高線では同じ農業をする。

だからね、僕らはね、標高600mところに自分のコーヒー農園、1000、700町歩くらいのコーヒー園をもっておった。だから自分の農園で栽培したのを炒っておいしいコーヒーをよく入れてた。牛乳とか入れてね。それからその上にはキナ、薬のキナを植えて、1300mぐらいに植えてという風に、おんなじ線に沿って。

台湾でも僕らは高いところでキナを植えておったからね。下ではできないから。

(盛健) 日本の農業教育というのはああいう意味からすると、まちがってないというか、あってますね。

(金城) 先生は沖縄はどこにおられたんですか。

(能彦) 僕はずっと沖縄です。もともとは宮城は首里ですが。

(金城) 首里。ああそうですか。首里のどこへん？

(宮城) 首里の赤田。

(金城) 私たちも元々首里ですよ。あそこの右側に昔の金城の屋敷がある、ぼくらの先祖の。そこは首里の、ぼくらの門中だから。地図持ってるでしょ？もってない？あるよ、持ってきてなさい。300年前の地図、しかし、不思議だな、機械も何もないのにさ、あんだけ地図を細かから屋敷の一人ひとりも名前入れて、道路も入れて、不思議だなあ。えらいよ。その地図の修復に20万かけたよあれ。20万。

(力人) 奥の、100年前の地図がありますよ。これは年代書かれてないから残念なんです、首里の城北小学校は近くに宮城さんといった古文書の修復専門がいるんですよ。その人にこの奥の100年のものの地図ももやってらったんですよ。

いまもうひとつ預けてあるのは、ちゃんと年度がかかれてないのでここだけの話なんです、赤

い筆記用具が使われてるんですよ。この地図に。もうぼろぼろですよ。私はこれまた奥から預かってきて、もってって、「宮城さん、これ偽者じゃないか、赤ペン使われている偽者じゃないか？もし宮城さんが見てね、本物ならちゃんとやっついていいけど、ですよ、偽者だったらやらんでもいいよ」って言ったわけですよ。そしたら向こうは向こうで、ちゃんと専門家に見てもらって、江戸時代から赤い筆記用具ががあったみたいですよ。そういうのがあって、この図面はおそらく明治20、33でした？23か、そのあたりのものだということがある程度判定してくれましたね。今これ作業中です。

これ、100年前の図にはですね、字上田。普通は字奥ですよ。字上田というのが書かれています。この地図の中に、字上田と書かれてるわけです。字上田という表記はね、いままで僕は見たことなかった。上田と書いていたのかな昔は？奥じゃなくて。

(金城) 小字だな、楚洲みたいなのは小字だった。昔の辺戸とかね、それとか楚洲みたくのとか伊江とかね。ああいうところは子字だからね。この意味で小字。

(力人) ああそうか小字。あは一。字(あざ)奥、小字(こあざ)上田であるわけですね。

(能彦) たぶん、奥は字(あざ)じゃないですよ。ムラ、奥ムラ。あの頃は国頭村ではなく、国頭間切

(力人) ああ僕らの時代考証がまちがっていたんだね。

(力人) 奥のウシデークあるでしょ、奥のウシデークの今の本、見たことありますか？

(能彦) ないです。

(力人) ウシデークの本を一番最初きちんとまとめたのはおばさん。

(金城ヒデ) 私踊るのとっても嫌でね。奥はあのウイミになったら踊らなくちゃいけない。踊らないと罰金されよったんですよ。とっても嫌でね、こんなのがなければいいのにと思っていたのに、とっても嫌な思いして、昭和25年に那覇にでてきたんですね。ほっとしていたんですよ。だけでも、何年かたってね、ここの同年会、同級生会で奥に私も一緒に行っただですよ、ついて私も一緒に。ウイミだったわけ、その日は。みんなきれいな格好してね、同じ着物着て一生懸命踊っているのがとってもすばらしいんですねその踊りが。私があんな嫌いだったウシデークはこんなすばらしいんだなと思ひましてね。

ちょうど婦人会長だから、これは絶対那覇にも残さないといけないと思って、それからやりだして、先輩のところいちいち歩き回ってお願いして、歌ったり踊ったりして。歌詞だけ持っている人がいたんですね。それをコピーしてやったら、皆、「これで歌が歌えるか」って言われるから、私は一生懸命ね、長めたり縮めたりしてきれいに書いて、又それを先輩方に見ていただいて、奥まで言って、テープレコーダー持って行って、奥の声を全部吹き込んで、那覇は元通りだけどどのように違うかなと思って。そういうことして、ようやく出来上がったのがあの本。大阪にもずいぶんいっているのよ、あれ。けどまた糸満トミ先生が作ったから私のは使わなくなっているみたいだけでも。

(力人) あのガレージがあって、その話を聞いて、私が借りてきてまた、ワープロで打って、製本してあげて。たくさん刷ってあげて、トミコ先生が作ったのは三代目だけさ。

(そのこ) 元があるからできる。

(金城ヒデ) トミ先生のはただ歌詞書いてあるだけで、長めたり縮めたりするところはないさね、私のは、歌詞だけはひらがなで書いて、ヤグイのところはカタカナで書いて。歌になるような感じとして書きましたでしょう。あれが一番歌いやすいと私思っているけれども。あれ(トミコ先生の)ができてから私のはぜんぜん振り向かなくなってしまうて。

(力人) 実はね、先月の末に、本当は先生案内したかったんだけど。繁田川で定例会やっているんですよ。毎月、毎月最終日曜ですよ。

まあいろいろあると思うんですがね。この前、雨が降りました。雨が降ったので急遽公民館でウシデークしたわけです。ヒロおばあー（比嘉弘子・道繰り仲）と、もう一人は高信屋のおばさん（知花文・高信屋）。それが座って歌ってるわけです。で、立って踊る人と、おたがい最初合わなかったんですよ。合うはずがないんですよ。

（金城ヒデ）合わないよ。たって節歌わないとぜんぜん、合わない。

（力人）これはお互い動きながら歌う、座っていて歌うというのじゃ合わない。

だから、那覇の練習の仕方も、私は言っているんですよ。去年かな、とにかく踊りしながら、歌いながら踊りながら練習やらんとだめだよって。やっぱちがいますよ。

（金城ヒデ）私は奥で見たときに、ほう、すばらしい。これは宝物だから絶対なくしちゃいけないと思って。あれから力入れたんですねえ、ちょうど今婦人会長してるものだから、その気がますます燃えたのかな。とにかく一生懸命やりましたね。

（盛健）その、歌詞はすばらしいものでしたね。

（そのこ）最初に書き出すのが大変ですよ。

（能彦）そのときとったテープは残ってないんですか？

（金城）あるんだろう。

（金城ヒデ子）テープはあるんじゃないかな。

（力人）あれ本も僕のところとおばさんとこにひとつしかないはず。僕の分もうあるかな、おばさんが作ったのよ。本当はいうところ、トミ先生もおばさんの名前も書けばよかったよ。参考文献としてさ。一番最初はおばさんだからね。ぼくは作ったものを、ただワープロで打ち直したただけであるわけさ。トミ先生は退職記念で作ったわけさ。

（能彦）奥さん、ヒデさんはおいくつですか？

（金城）大正15年。5月21日。

（盛健）よく覚えているなあ。

（金城ヒデ子）だから最初はね、何で歌詞にカタカナ入れたりするか、平仮名入れたりするかと言って怒られたから、平仮名は歌詞、カタカナはヤグイだよと言ってから説明したら納得していたけども。

（力人）今のみたいな言葉いった方がいいんですよ。カタカナの「ヤグイ」というのわかりますか？こうヤグイというのは、こう。

（盛健）フェーシ。（お囃子）

（金城ヒデ子）そうです。で、平仮名だけだったらさ、分からないでしょ？歌詞なのか何か。だから、ウシデークの歌詞は全部平仮名で書いて、カタカナは全部「ヤグイ」ナトールバーター。

（盛健）力人が専門であるんだけど、昔子どもの頃見たコーコー、何て言うんですかね、いろんな古典でエグーするときの、あのリズムを今見ると、本当、あのリズムというのは、本当、何とも言えないリズムでありますね。

（力人）だから、それに合わせてこれ（ヤグイ）も引っ張ったり書いてあるわけだ。

（金城ヒデ子）とって一生懸命やったよ私。とにかく一生懸命やりました。

（金城ヒデ）トミ先生のこれが、郷友会誌に載ってるでしょ？それを、褒め称えたわけだ。そしたら、フジコお姉さん（宮城富士・仲前小）が立ってね、「このウシデークね、最初に本にしてやり出したのは、ヒデ子コなんですよ。」と言って、「無くなるうとするのをね、ヒデ子が気付いて一生懸命やり出して、本も作って、テープも作って、郷友会全部それで復活してみんなで踊るようになったんですよ」って言ったから、「ああ、そうですか。」と言って。で、私また、「あいさつしなさい。」って言うから、立ってあいさつした。

（能彦）本当、掘り起こすのは大変ですよ。

(ヒデコ子) だから、なくしてはいけないと思ったの。あっちこっち歩き回ってね。それ、若かったんですよ、やっぱり。

(能彦) 今日貴重な話の数々、ほんとうにありがとうございました。